



# 春よ来い

## 第四九六回

## 伯母の日記

伯母の通夜式が行われた日のことでした。数年ぶりに、いや、十数年ぶりだったかも知れませんが、伯母が書き続けていた日記と再び出合ったのは。

式が始まる少し前、受付脇のコーナーに行ってみてびっくりしました。伯母の連れ合いの姉妹などの写真や週五回通っていたデイサービスからの連絡帳などとともに伯母が数十年間書き続けていた日記の一部が展示されていたからです。

展示されていた日記は二〇一四年と二〇一五年の二冊。伯母が書いた数十冊の日記の中では、一番新しいものと二番目に新しいものでした。どちらもすぐに読んでもらえるようにと、開いて置いてありました。

メガネをはずして二〇一五年のものに目を近づけると、伯母が最後に書いた日のことが記されていました。

五月一日(月) 晴れ。「きょうも一日中よいお天気であった。午後二時過ぎに家を出て、高田へ世話になり来た。尾神をさいならしてきた」。

日記の中の「家」というのは、伯母が長年住んでいた吉川区尾神の家のことです。七〇年ほど前、伯母は、わが家からわずか三十メートルくらいしか離れていない隣家に嫁ぎました。三年前の五月一日、伯母は住み慣れたその家を離れ、長男が住む家に引っ越したのです。

伯母が引っ越すことになったのは、その半月ほど前に伯父が病気をし、急に亡くなったからです。以前、伯父が「(夫婦の)どちらかが亡くなったら子どもとこころへ行く」と言っていたのを聞いていたので、予想はしていたのですが、正直言って、早い決断に驚きました。

伯母が引っ越した日をもって、長年書き続けた日記をやめたのは、どういう理由で

あつたかはわかりません。そもそも、日記をやめたことを私は知りませんでした。ただ、伯母が書いた「尾神をさいならしてきた」という文言から、これまでの暮らしから新しい生活に入る決意のようなものを感じることができました。

伯母が私に日記を見せてくれたのは、尾神の家で一緒に茶飲みしているときでした。きっかけは、私が書き続けているこのエッセイだったと思います。

「おれも書いています」と伯母が見せてくれたものは農協が発行している「家の光」に付録としてついていた家計簿でした。家計簿の上の方に五〇字から六〇字くらい書くことができる四角い空間がありました。伯母の日記はそれを利用したものでした。その日の天気、農作業、来客の記録などをコンパクトにまとめてありました。

伯母から見せてもらったのは一回だけです。でも、すっかりした文字で毎日書き続けていることを知って、伯母の日記のことは伯母の几帳面さとともに私の記憶にしっかりと刻まれることとなりました。

通夜式の日。伯母の日記を再び見るようになった私は、レンコン、ネギ、シイタケなどの野菜が描かれた表紙を見て、「これが、かちやが書いていた日記だったのか」と伯母のことを懐かしく思い出しました。

伯母の日記のいくつかを読み、改めて思ったのは、単に事実を記しただけのように見えるものでも、書いた本人の心の動きが見えることがあるということでした。

例えば伯父が緊急入院し、亡くなった日の日記。最後の一行は、「父さん七時、目がおった」でした。この一行だけ、乱れた文字となっていました。日記を書き終えてから訃報が入り、書き加えたのでしょうか。読んだ途端、涙がこぼれ落ちました。

## いろんな世代の住民が担い手になり、楽しく、コツコツと

頸城希望館で4日、地域活動フォーラムが行われ、参加してきました。このフォーラムは「誰もが出番を持ち、居場所を持つ地域づくり」(主催者挨拶)を進めていくために企画されたものです。

### 上越地域各消防署における空間放射線量測定結果

測定は毎日午前9時。数値はマイクロシーベルト。1時間当たりの測定量です。消防署によると、通常は1時間当たり0.016~0.16μSv(マイクロシーベルト)だとのこと。

	2月28日(水)	3月7日(水)
上越南消防署	0.040	0.047
上越北消防署	0.043	0.047
新井消防署	0.040	0.047
頸北消防署	0.047	0.047
頸南消防署	0.070	0.050
東頸消防署	0.043	0.037
高士分遣所	0.047	0.047
名立分遣所	0.053	0.053

三郷区地域協議会の保坂裕子副会長、諏訪区地域協議会の星野一巳会長、「移住促進諏訪の会」の古川正美会長は、高齢者支援の課題や移住促進の課題を継続して取り組み、「楽しみながら、できることから少しずつやっていく」とこの大切さを明らかにしました。

牧区の「よもぎの会」の小林良子理事長は、会が取り組む①農業・食体験交流、②農産物加工販売、③高齢者への食事宅配の活動を報告しました。地産地消にこだわり、高齢者に小豆を「よってもらっている」とか宅配弁当に小学生からの手紙を添えている話など、心があたたかくなるものでした。活動を継続するには技がいる、いつも笑顔で声をかけるなども大切なことだと感じました。

中郷区まちづくり振興会の竹内靖彦理事長の「若者の色で未来へ繋ぐ」という報告も良かったです。「いろんな世代の住民が担い手になっている」(上越教育大

の吉田昌幸准教授)という中郷区ですが、60代、70代の人たちが築いてくれた土壌の上に、若い人たちの力で夏まつりや雪ん子祭りなどの活動をワクワク楽しみながら行っている様子が生き生きと伝わってきました。声に出せば形になる、ポジティブな発想をしていくことが大切だという主張はうなずけました。

5団体代表の報告はいずれも今後に生かせる内容で、勉強になりました。



写真は「よもぎの会」の報告風景。